



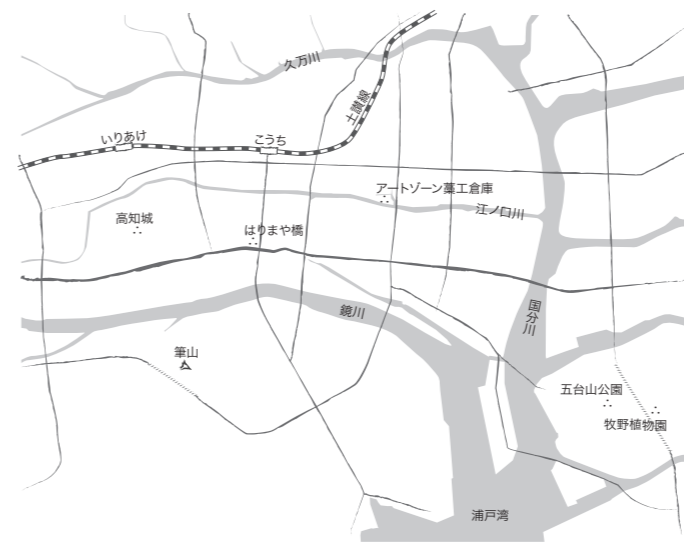
暮らしの風景

公害を克服して 水の都の再生へ

〔高知県高知市〕

太平洋に面する浦戸湾の奥、
鏡川と江ノ口川に挟まれた
水の都市として発展した高知市。
公害の惨事をのりこえ、
水を活かした都市づくりに
市民が踏み出している。

文——陣内秀信 *Hidenobu Jimnai*
絵——佐々木悟郎 *Goro Sasaki*



日本の都市史で最も重要なカテゴリーは城下町だ。その中には、川が海に注ぐあたりに広がるデルタに立地し、水の脅威と戦いながら見事な「水の都市」をつくり上げたところが多い。昨年の東日本大震災の津波による惨事をきっかけに、われわれ日本人は、水辺の都市をどう守りながら、魅力ある生活環境をつくるのか、という大きな課題を突きつけられている。

南国土佐を後にして／水の都市・高知

今回取り上げる高知も、土地が低いため強烈な台風等の際にしばしば洪水に悩まされたという。津波への備えをも含め、河口の海に近い土地にいかにも魅力ある水の都市を再生するか、今、熱心な市民たちがそのテーマに取り組み始めている。坂本龍馬で観光的にも何かと話題になる高知だが、都市風景そのものの魅力を「水」をキーワードに描くことが可能なはずだ。

ある年齢以上の方なら誰もが、ペギー葉山の歌った『南国土佐を後にして』を懐かしく思い出すに違いない。この歌が大ヒットしたが、日本が高度成長を迎える直前の一九五九年。そこに登場する土佐の高知の「はりまや橋」こそ、水の都市、高知の象徴的存在だった。城下町の

かつては死の川だった江ノ口川のほとりに残された倉庫群が、リノベーションされアートゾーンとして蘇った。若いアーティスト、クリエイターたちの発信基地であり、個性的な美容室や土佐の食材を生かしたレストランもあって、市民がお洒落に文化、アートを楽しめる素敵な場所となった。水の都市の再生を象徴するプロジェクトだ。



暮らしの風景



市街地の東、県立五台山公園の展望台から望む「水の都市」高知の市街地。
正面の西側から流れてくる鏡川と右の北側から流れてくる国分川が南側の浦戸湾に流れ込む。
江ノ口川は国分川に注ぐ川で、右側の市街地の中を流れている。

まさに中心で、今も最も繁華なこの界限には、市街地の背骨にあたる堀川が流れていた。高知を代表する豪商の播磨屋と櫃屋が、互いの本店が堀で隔てられていたので、両者の往來のために架けられた私設の橋が、はりまや橋の名称の由来だという。だが、近代化による街路整備で、堀川のある部分は目抜き通りに置き換えられ、さらに一九六〇年代、市街地河川の水質汚濁が顕著となり、堀川はほぼ全長に渡って埋め立てられる運命となった。つまりこの歌は、川が生きていたぎりぎりの時期に一世を風靡したことになる。時代が巡って一九九八年、車道の隣に歩道専用の太鼓橋として新しいはりまや橋が設けられ、橋の下に人工水路がつくられたとはいえ、水の都市のわずかな記憶は、どこか寂しい。

公害を克服し、多様な水域が蘇る

案外知られていないが、実は高知は、水俣と並び、公害の惨状を体験した都市なのだ。高知を流れる江ノ口川沿いの市街地に、戦後建設された高知バルブが二〇年にわたり廃液を流し続け、水の都市の川、湾の全体に甚大なる公害の被害を生んだ。海と一体の生活を奪われた漁民、汚染で生命を脅かされる住民の反対運動は激しかった。「高知生コン事件」と称される住民側の実力行使が功を奏して、一九七一年、ついに工場を操業停止に追い込んだのだ。

その後、人びとの努力が実り、かつての美しい浦戸湾の水質も蘇り、魚が戻って、今では水を活かした都市づくりにより市民が踏み出している。私もこうした熱心な市民のグループから講演に招かれ、町をご案内いただいて、水の都市、高知の魅力に「はまった」というわけである。

城下町の東に聳える五台山からの眺めは天下一品だ。高知の幾筋かの川が流れ込む今の市街地は、中世にはまだ海の下だったという。関ヶ原の戦いの功績により徳川家康から土佐一国を拝領した山内一豊が、この地を城下町とすべく、慶長六年（一六〇一）、小高い山頂に城を築き、鏡川、江ノ口川を整備して、その間の湿地帯を造成して城下の市街地とし、内堀、外堀、新堀川を巧みに配し、水のネットワークのなかに武家地、町人地をつくった。そして、五台山の展望台からは、こうしたすべての堀、川が合流し南に向かって浦戸湾に流れる水の都市の全体像が手に取るようにわかるのだ。水質が改善され、魚がたくさん戻ったこの広くて多様な水域を二十一世紀の価値観で活かせば、高知の未来は明るいはずだ。

アートゾーンの誕生

残念なのは、町の中央部を南北に流れる新堀川において、延々と続く石垣、所どころに設けられた階段状の船着き場である雁木が、実に豊

かな表情を与えているのに、つい最近、反対運動も空しく、広い範囲に道路の蓋がされてしまったことだ。まだ残っている新堀川の石垣が連なる美しい水辺を見ると、歴史と自然の貴重な資産を目の当たりにできるだけに、悔いが残る。だが、こうした運動を期に市民の水の都市への思いが高まり、嬉しい動きが生まれてきた。かつては死の川だった江ノ口川に架かる一文橋の両側に、水の都市再生の象徴的なプロジェクトが恰好よく実現しているのだ。舟運が活発だったことを物語る水辺の倉庫群が舞台である。戦後間もなく、地域一帯が田園だった時代に藁製品の備蓄販売のためにつくられた倉庫で、ほとんど使われずにいたものを、二〇〇六年以降まず橋の西エリアが、さらに二〇一一年に東エリアの三棟がリノベーションされ十二月二十三日、「アートゾーン藁工倉庫」が誕生した。若いアーティスト、クリエイターたちの発信基地であり、市民がお洒落に文化、アートを楽しめる素敵な場所だ。個性的な美容室や地元食材を生かしたレストランもある。倉庫群の迫力ある佇まいが現代的に見事に演出され、「水の都市」の未来を予感させてくれる。

じんない・ひでのぶ ●一九四七年、福岡県生れ。七三〜七五年、イタリア政府給費留学生として、ヴェネツィア建築大学に留学。七六年、ユネスコのローマ・センターに留学。帰国後、八三年、東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。東京大学工学部助手、法政大学工学部建築学科助教授を経て、現在同大学デザイン工学部教授。建築史家。